

第23回

ハンセン病問題に関するシンポジウム

～人権フォーラム2024～

「高校生によるハンセン病回復者とご家族への聞き書き」作品集

主催：厚生労働省、法務省、文部科学省、全国人権擁護委員連合会

共催：全国ハンセン病療養所入所者協議会、

ハンセン病連憲国賠訴訟全国原告団協議会、

ハンセン病家族訴訟原告団、

ハンセン病連憲国賠訴訟全国弁護団連絡会

後援：東村山市、日本皮膚科学会、日本ハンセン病学会、ハンセン病市民学会

自分が決めたことはとことん貫く……………5

語り手 岡克之 国立療養所多磨全生園入所者
聞き手 聖心女子学院高等科 1年
青山愛佳 石川真子 河野未悠 脇野亜優

人間らしく生きる……………11

語り手 石田雅男 国立療養所長島愛生園入所者自治会副会長
聞き手 岡山県立邑久高等学校 2年
田中芽依 木村有布乃 松田愛香 矢延彩矢

絶対に味方はいる 誰かの味方になる

「気づかれない被害者のために私たちができること」……………17

語り手 ハンセン病家族訴訟原告 Aさん
聞き手 聖心女子学院高等科 1年
江川カンナ 緒方ゆい 神田優子 北山葵 崎田日和

本紙に記載している学年は2023年度当時のものです。



聞き書き取材時の記念写真 石田さんと邑久高等学校のみなさん

自分が決めたことはとことん貫く

語り手

岡克之

国立療養所多摩全生園入所者

聞き手

聖心女子学院高等科1年

青山 愛佳

石川 真子

河野 未悠

脇野 亜優

■発症

僕の家は大きな家で、両親とおじいちゃんとおばあちゃん、ひいおじいちゃんといひおばあちゃんがいて、屋敷も大変なものでした。兄弟は、4人いるんですが、僕が小さい頃は、妹と弟は生まれていなくて、2人兄弟でした。僕は、小学4年生までは普通の子だったんですが、ちょうど小学4年生くらいの時に1週間くらい高熱にうなされたんです。家族が近くの病院に連れていってくれて、診てもらいましたが、何の病気がわからなくて。家族からはもうこの子は危ないんだと、半分見放されましたが、最後に、町医者に頼んで注射を2、3本打ってもらったら、1週間後に回復したんですよ。そうしたら、右足を引きずるようになりました。その足が悪くなった時に、バスで学校に通う最中、同じクラスの女の子でちょっと好きだと思っていた子に冷たくされた思い出があります。その時は、こんな奴に好かれなくてもいいや、と思いましたけどね。そして、群馬県中の病院をあちこち回るようになって、どこの病院でも、小児麻痺だといわれました。小児麻痺の施設に行っただけで、そのくらい症状が軽い人は、

うちでは預からんと言われ、家に帰り、学校に行くようになりました。

その後、体がちょっとおかしくなり始めたのは、中学1年生になった頃でした。あちこちの病院に行っただけで、小児麻痺だとか脊髄の病気だとか言われました。最後の最後、高崎にある陸軍病院を訪ねたんです。陸軍病院ってのは、軍隊の兵隊さんについていくお医者さんのことで、軍医さんは、いろんなところに行くから、ハンセン病の多いフィリピンやマニラなどの熱帯地方を見たことのある人たちでした。だから軍医さんに見てもらって、ハンセン病だと分かったんです。僕の家はお金持ちでしたが、節約家だったので、なかなか家に医者を呼ばないので、僕は全生園に入ることになりました。

■苦勞が多かった全生園

全生園の少年寮は厳しくて、寮父という人がいました。生徒は少年寮に僕をいれて4人くらいしかいなかったんだけどね。朝は6時前に起こされて、夏でも冬でも表でラジオ体操を全部させられる。それが終わると各部屋に戻ってほうきで掃き掃除、長い広い廊下を今度は全部雑巾掛け。そ

れで今度はみんなで朝ごはんの用意をして食べる。朝ごはんはそれこそ軍隊方式のようなかたちで、非常に苦勞しました。僕は長男で甘やかされて育つてのんびりしてるから、朝ごはんにしる夕ご飯にしる僕がゆっくり食べてる間に他の連中はみんなガールと食べておかずも少ないのになくなっちゃうわけだね、ご飯おかわりつていったつてもうご飯がないの。そういう経験をしてないもんでね、いつも腹へっちゃつてね。でも食べるもんもないし、それで寮父におかずがないんだけどおかずをいつたら塩と梅干しくらいしかなくて、だからこれはいかんと思つてね、こんなことしたら俺死んじゃうと思つてね。それでそれからその環境に慣れようとして、みんなよりも早く食べようと、いろんな面で苦勞しました。

■好きな女の子と疎遠に

新良田教室は岡山県瀬戸内市邑久町虫明にある学校で、全国の療養者が行く学校でした。4年制の学校で、僕は高校3年生の時、九州や沖縄出身が多い看護学校の女の子と知り合い、船に乗って映画を見に行ったんです。その船に乗った時、知らない乗客のおばさんに、後ろの席に座れと言われ、差別を受けました。その船は外部の人と療養者を分ける作りになっていたんです。僕は何でこんな差別を受けなくてはいけないのか、好きな女の子と隣に座れないのかと思つたよ。港に着いた後、2時間40分バスに乗るが、それでも隣に座れなかった。映画館では隣に座り「風と共に去りぬ」を見ました。それは本当に良い映画で感動しました。しかし、島に帰つてきた後、誰かに言いつけられて、その子とは疎遠になってしまった。後で聞いた話だとその子は、患者と付き合うか、それとも看護婦の仕事を辞めるかどちらかにしろと命令があったみたいだった。彼女からは手紙を書いて貰えず、僕からの手紙も届かなかつたんです。

■新良田教室での辛く思ふ出

この学校の先生は、僕たちが触つたものを汚いと言つて素手で触ろうとせませんでした。例えば、僕たちが使つたチョークには革でできたカバーをつけて触つたりするんだよ。また、僕たちは自分でノートや鉛筆などを買いに行けないため、先生にお金を渡して買ってもらう必要があるつた。僕たちがお金を渡すと、先生は目の前でまず小銭をクレゾールにつけて洗い、お札はそれに漬けたものをガラスに貼つて乾かした。僕はなぜ僕たちの目の前でやるのかと思ひましたよ。また、先生が夜の見回りの時に、廊下を土足で歩いてきたりするんです。僕はこんな事をするのが教師であつて良いのかと思ひ、先生に反抗しようとしたんです。これまでの生徒は我慢していたが僕たちは先生相手に戦いました。

■尊敬している村田先生

本土から来た村田先生は、他の先生とは違ひました。これまで、学校の先生は僕たちの部屋に入るといふことはなかつた。しかし、村田先生が当直の時に、「お腹が空いたので何か食べるものはないか」と僕たちの部屋にやってきました。僕たちはちょうどインスタントラーメンを皆で作つて居る時でした。僕たちが作つたものを食べたくないのではないかと思つたが、村田先生は「一緒に食べたい」と言つてくれました。僕たちを初めて認めてくれた先生で、これぞ教育者、これが本当の教育ではないかと思ひました。その先生に交渉して、お金を洗つたりチョークにカバーをつけたりするのはやめてほしいと言ひ、それから徐々になくなつていきましたよ。僕はその先生に本当に感謝しています。

■下級生に何を言われよう

3年生の2学期、3学期は足の整形手術のため学校に出られなかった。そのため、成績が良いが単位が足りず、もう1年やり直す必要があったんです。その当時の島の学校は上下関係が厳しく、1年生なんていつでも先輩の言う事を聞いていなくてはいけなかったんです。僕自身も先輩に命令をしていたため、1年下の後輩と一緒にの学年になるなんて考えられなかったんですよ。長島愛生園は裏の崖を登ると海があつて、自殺の名所と呼ばれていました。僕はそこに向かおうとしました。しかしそこに行くまでの道は大変で、手足はぼろぼろになってしまいました。僕はなぜこんなにも自殺をするために苦労しなくてはいけないのか、また、僕が死んだら両親は悲しんでしまうと思い、坂を下りて病棟に帰りました。病棟では優しい婦長さんに、「お風呂に入って看護婦に傷の手当してもらいなさい」と言われました。僕はお風呂の中で泣いて決心をし、下級生に何を言われようが悪く言われようが頑張つてもう1年やり直し、多磨全生園に帰りました。



新良田教室での写真

■公民館活動

多磨全生園に戻つてから自治会の書記をやり、公民館を開設する活動をしました。今まで公民館がなかった東村山では、身体障害者連合というものがありました。障害者の団体だったので、活動があまりできなかつ

たんです。そこで市民団体とも協力して、東村山に公民館を作ってくれとお願いにいったんですが、東村山は貧乏な市でお金がなかった。それで私は全生園にも自治会にもいながら、身体障害者連合、それから市民の会と協力して、久米川駅、東村山駅、秋津駅で署名運動をして、なんとか市長と掛け合つて、ようやく公民館ができました。そのあと体育館だつて運動をしてできたんですよ。

■諦めずに続けた将棋と陶芸

多磨全生園に戻つてから打ち込んだものの1つに将棋があります。将棋は子供の頃からやり続けたもので、自分が何か一番上手になれば、自分の生き方についても強みになるだろうと思つて続けました。全生園に入院したのは中学校1年の時で、入院当時は病棟に入っていたので、病棟ではほとんど娯楽がなく、大人の人たちはベッドの横で囲碁や将棋をやっていた。自分も何か得意なものを持とうとした。そうすれば自信にもつながる。やり出したからにはとことんやろうと、続けました。ですから、将棋は我慢ではないけど全生園で一番強くなりました。僕の1番強かった時は全国の療養所で一番くらい強くなりました。

園内だけでなく東村山の大会とか埼玉県の大会にも出ました。やっぱり外の大会のレベルは高くて、特に対局になると持ち時間でやりますから、時計を自分で押すんですよ。そうするとどうしても、病気で手が悪いと押し損ねたりするんです。駒を掴み損ねたりすることもあつて。駒を落としたからやり直しというわけにはいかななくて、その場で即退場になるんですよ。

将棋の思い出では、加藤一二三先生が教会の関係で全生園に来てくださったって対局しました。我々将棋クラブの強い人5人が並んで、真ん中に先生が座つて、同時に5人が対決するんですよ。やっぱりプロですからね、

なかなか勝てませんでした。僕も苦勞して強くなりました。だから園内も強くなってやると。一つの生きがいでもあるし励みでもあったんです。

■ゆいこびもあはれいじ

もう一つ、多磨全生園に戻ってから打ち込んだものの一つに陶芸があります。陶芸をなぜとことんまでやったかというところ、やっぱり自分も手足も悪いし、他に取柄がないと考えたからです。陶芸は、後に東村山の中央公民館に教えるに行くこともありました。東村山に住んでる奥さん連中20人に教えました。その時に、やっぱり技術とかそういうものがないと、奥さん連中がバカにしているかと思っているのではないかと思いました。僕は陶芸ができるのだろうかと思っているのではないかと思いました。僕は最初はいやだよと言ったんだよ。自分で作って、まだ勉強の段階で教えるものじゃないと。だけど頼むから行ってくれ、何もしなくていいから教室の隅に座っていてくれと言われたので、最初は座っていました。ある時、ある奥さんが私に作品を直してくれと言ってきました。ツボがちよつとひん曲がっていて、これを直せって。前の先生に手を出さなくていいって言われているからダメですと答えたなら、頼むから行って言われました。それで、じゃあ直すからそこで見てなさい、そしてやり方を勉強しなさいと伝えました。それでその曲がっていたツボを半分くらい切って、その奥さんの個性を保ちながら直した。これが難しいんですよ。完全にやったら僕らの作品になっちゃう。それじゃあダメなんだよ。だから奥さんの個性を残しながら僕の技術でいい形に直したんです。その奥さんはびっくりして、それで奥さん連中が僕の存在を認め



岡さんが作成した作品

てくれたんです。この人は技術がない人じゃないんだと。その後、他の生徒さんにも、私も私もって言われて、直しました。そうしたら奥さん連中に受け入れられて、お昼に先生のご飯を買ってきますって、奥さん連中がおかずを持ってくるんです。それをみんなでお裾分けして、そうやって受け入れられましたよ。自分の体で身につけた技術っていうのはやっぱり通用するもんだなと思いました。見せかけのものではなく、僕の技術を認めてくれたんです。生徒さんが作りかけたのを直すっていうのは大変難しいんです。自分で作ったら早いし、上手にできるんです。それを人が曲がったようなのを直せっていうのは厄介なもんです。でもそれは苦勞して自分の腕に技術を身につけたお陰だと思ってます。

それでも、陶芸を辞めようと思ったこともありましたが、展示会に出してもなかなか賞を取れない。東京上野の美術館の現代工芸展に出したんですが、何回か落ちたんです。大きな展覧会に出品するには、どんなに小さい作品でも一点につき7000円も取られ、自分の手で搬入もするから大変なんです。賞を取れなくて、持ち帰る時に上野公園を通りながら泣く泣く帰りました。俺は才能がないんだと。手が悪いし、入選している人は武蔵美大とか多摩美大とか大学を出ている人が多い。あとは有名な陶芸家のお弟子さんとか、息子さんとか。僕みたいな全生園の人が出たって入選



作品展の様子

できるはずがないと。だから諦めて一時遊んでいましたよ。でもそのうち、このまま辞めたら元も子もないだろうと思った。何としてでも陶芸で賞を取って、肩書きと技術で社会復帰して、それで陶芸家としてやろうという風に決めたんです。そのためには辞められないと思った。

陶芸を続けて、その後個展を開いたときに、自分の両親と兄弟を招待しました。そういうことがないと、この療養所に居たら、親とか兄弟とかを呼べない。病気になるって何しに行くんだとなるが、僕が頑張って続けたおかげで、両親を呼べたし、兄弟を呼べた。両親は喜んでくれました。お前、ここまでやるとは、と。それは1番うれいすよ。療養所に入ったら、昔だったらもう終わりだと、親だつて来ない。だから、何事も1年や2年やって、ダメだとあきらめるのはだめですよ。最低でも、

何かをやるうとして、10年くらいやらないと、先は見えない。だから、続けるためには、試練ですよ、それが大事なの。休んでもいいから、始めること。僕も、何度やめようと思ったか。もう才能がない、俺なんかダメだと休んで、遊びほうけたこともありましたが。でもそのうちに、このままでいたら、俺は何のために生きてきたんだと、じゃもう一回始めるかと思いましたが。だから、休んでも、止まってもいいからまた始める。暗礁に乗り上げたら休んでもいいのよ。でも、また、歩んでいかないと、先は見えない。だから、自分のものにするってことは、大変なことですよ。だからゆっくりでもいい、カメさんのようにゆっくり歩むことですよ。これは僕の生き方ですよ。

〔取材日…2023年8月31日／10月22日〕

【聞き書きを終えての感想】



私はこのプロジェクトに参加するまで、ハンセン病について名前は聞いたことはあっても詳しくは知りませんでした。ハンセン病の患者さんが触った物を洗ったり、場所を隔離したり、とこんなにも差別されていたことも知りませんでした。

今回2回の岡さんへのインタビューを通して、岡さんには二つの大切な事を教えていただきました。一つ目は「何事においても自分がこれだと思ったらとことんやるのが大切。休んでもいい」ということです。私は、いつもやると決めても諦めてしまうことがよくあります。しかし、この言葉を聞いて、私も岡さんが10年間続けた陶芸や将棋のように、何かやり続けたいと思う事を見つけて、休んでもいいから、挫折してもいいから続けていきたいです。

二つ目は「嘘をつかないこと。約束をするのならば、守れない約束をするな。できない場合は事前に連絡することが大切」ということです。私はこの言葉を聞いて、嘘をつくことは人を傷つけて、人からの信頼を失ってしまうなどと思いました。この2つのことを心に留めて、これからの生活を過ごしていきたいと思います。(青山愛佳)



2回のインタビューを通して、ハンセン病に対する偏見、差別についての理解を深めるとともに、様々な教訓を得ることができました。私は、インタビュー以前にも、ハンセン病に対する差別や偏見が存在したということは知っていましたが、身近な問題として考えるのは難しく、歴史上の出来事としてとらえている面がありました。しかし、今回、岡さんの生の声を聴くことで、ハンセン病に対する差別の問題は、決して過去に起きた出来事というだけではなく、現在の私たちが真剣に考えていくべき問題なのだと感じました。また、岡さんのお話の中で、得意なことを持つことは自信につながるという言葉が印象的であり、岡さんの言葉から多くの学びを得ることができました。今回の貴重な経験を活かし、自分の得た情報を発信していくとともに、今後もこの問題について考えていきたいです。(石川真子)



私は初めハンセン病とは何か、どのような病気なのか知らず、ハンセン病に対しての知識は何もありませんでしたが、インタビューをし、岡さんの人生とハンセン病について知ることができました。私たちは何度か研修を受け、岡さんにインタビューをさせていただきました。岡さんは私たちに、ご自分の人生だけでなく、私たちが生きていく上で大切なこと、守らなければならないことなどを沢山教えてください、取材をさせていただいたことで、ハンセン病についての知識を深めるだけでなく、私自身も人として成長することができたと思います。

ハンセン病回復者の方々には皆高齢になっていて、ハンセン病について伝えられる人は少なくなってきているのではないかと思います。私が今回このような経験をさせていただき、今ではありえない法律を政府が作り、差別が行われていたこと、辛い思いをされた方が沢山いらしたことです。これらを私たちが次の世代に伝え、これからの社会を担う若い世代である私たちが、二度とこのようなことが起こらないためにどうすればいいのか考えなければならないという使命感を持つことができました。(河野未悠)



聞き書きを行う中で、ハンセン病の知識以外にもたくさんの学びがありました。私が特に印象に残ったのは、岡さんの妹さんが結婚したことを岡さんに伝えず、結婚式にも呼ばず、岡さんがいないものとされていたというエピソードです。高校生の時には、先生にも偏見を持たれて、ひどい接し方をされたというお話も聞きました。1番の味方でいてほしい家族でさえそのような対応だったと聞いてとても心が痛みました。岡さんはこの出来事があった時、自分がこの世の中で必要とされていないと思い、泣いていたそうです。それでも負けずに、そして家族を責めずに、自分の強みとなることを追求し続けた岡さんは本当にすごいなと思いました。将棋、陶芸で、岡さんは高いレベルまで上り詰めました。指先が不自由で周りの人と比べて難しいこともあった中、一度決めたことをやり通す強い心を持って、それを語る岡さんはとてもキラキラしているように見えました。休んでもいい。カメのようにゆっくり歩んでもいい。でも決めたことはやり続ける。この岡さんの言葉は、10代の私たちにとっても、とても大切なことだと思いました。ハンセン病回復者の方々には高齢の方が多く、今回お話いただいたことはとても貴重な体験です。お話いただいたことを心に留めて、周りにも伝えていきたいです。(脇野亜優)



profile

岡 克之

1948年6月3日・75歳

国立療養所多磨全生園入所者

【略歴】 中学1年生のころにハンセン病と診断され、多磨全生園に入所。その後岡山県立邑久高等学校新良田教室に入学し、卒業後は多磨全生園の自治会で書記として務める。将棋や、陶芸等で様々な活躍をしている。

人間らしく生きる

語り手

石田 雅男

国立療養所長島愛生園入所者自治会副会長

■自己紹介

私の名前は石田雅男といいます。1936年8月12日生まれで、現在87歳。出身地は兵庫県の明石市です。

■発症

私は10歳の時にハンセン病を発症しました。まだその当時は「らい病」と言って、その病気のことを全く知りませんでした。当時小学4年生だった私は、頭がとても重いというか、皮膚が麻痺したような、痺れているような状態になっていました。ですから、頭に触れられるのがとても嫌だったし、風呂場で父親のゴツイ手で頭を洗われることを想像すると、もうほんと震え上がるほど嫌でしたね。

そんな状態だったので、親から床屋さんに行きなさいと言われても、なかなか素直に行くことが出来ませんでした。ところがある時、私は自分から床屋さんに行って散髪しようと思いました。頭の隅では、これできつと両親は驚いて喜んでくれるだろうというような思いが突然働いて、学校

聞き手

岡山県立邑久高等学校2年

田中 芽依

木村 有布乃

松田 愛香

矢延 彩矢

が終わってから床屋さんに行つたんです。床屋の待合には、おじさんが長椅子に座っていたので、その横に私も座りました。すると、そのおじさんは、私のことを気持ちの悪いほど見つめる。顔の隅々、それから肩、胸、腕。流し目でどんどん見て回る。「何だこのおじさんは。気持ち悪いな」と思っていたら、おじさんに「今日、散髪が終わったら、私を君の家まで案内してくれないか」と言われ、おじさんと私の家まで行つたんです。それで、おじさんが私の両親に言ったのは「らい病にかかっているようだ」と。私が「らい病」という言葉を聞いたのはその時が初めてでした。そのおじさんは衛生警察官で、主に浮浪患者を説得して療養所である長島の愛生園に連れていく役目を負っていた人でした。その後、2、3日して、お医者さんが家に来て、私の顔を見るなり「うん、らいだね」と言い、私は愛生園に入所することになりました。

■入所

愛生園に来るときは、おふくろが駅までついて来てくれたんだけど、父親は隠れて私の前には出なかった。後でわかったことだけど、父親がお

ふくろに「お前が送ってやれ。自分はもう辛くてきん」と言っていたそうです。それで、駅から「お召し列車」という、一般の列車のうち、一両のみハンセン病患者専用の車両がある特別な列車に乗って岡山駅まで連れて来られました。岡山駅には17時頃着いたと思う。でも降りられたのが夜中の0時頃。それから、駅前に停めてあったトラックに荷物のように乗せられ、2時間半かけて虫明まで行きました。今は1時間足らずで行けるんだけど、当時は道が悪くて。被せられた幌に枝がこすれる音が、私の恐怖を煽りました。そして虫明の港で船に乗って、愛生園に着いたのは明け方近くでした。

長島に着いてから、一睡もしていないのに、眠るのは後回しにされて、まずは消毒風呂に行きました。体は洗わずに風呂に入って、浴槽の中で身を沈めて、上がってまた服を脱いだところに戻りました。すると、持ってきたはずの風呂敷包みがなくなっていました。その中にはお金が入っていたので、どこにいったのかなと思っていたら、係の人が「もうすぐしたら戻ってくる」と言ってくれた。その後、言われた通りに風呂敷包みは戻ってきたが、中を見ると財布の中にはお金はなく、今まで見たことがない、紙を印刷したものが入っていた。それを手にとって、一体なんだろうと思っていたら、係の人が「それはこの収容所の中で使えるお金だ。どんなものでもこれで買える」と、これが初めて「園金」というものに触れたときです。

■入所後

子供時代はご飯を3度食べるとはまずなかったね。だから、自分でちで食料をつくらないといけなくて、午前は学校へ行き、午後は畑作業をしていました。この畑作業が重労働で、空腹の状態に畑に駆り出されるのはとても辛かった。この病気の症状の一つに麻痺があり、痛いとか熱いと

かいような感覚はありません。ですので、この畑作業はもろにこたえる。農作業で手や足に傷ができては休むことが許されず、そのまま農作業に駆り出される。すると傷が悪化したり、化膿したりする。しまいに指や足を切断する。でも、ひどい状態になっても痛みを感じない。大勢の人が子ども時代に、手や足の指を切り落としています。

でも、入所してから楽しかったこともありました。それは運動会です。短距離の100メートル競走や玉入れなどがありました。職員さんや看護師さんは、普段はものすごく厳しくて、一定の距離を保った態度で接してくることが多かったです。でも、この運動会るときは一緒に相撲をとったり盆踊りをしたり、互いに話を交わすこともできましたね。

■父親とのやりとり

子どもの頃、私が愛生園に入った当時は、帰省はできない代わりに、面会を受けていたんです。私が入った翌年、両親の面会があった時に巻き寿司が出た。私は子どもの時から巻き寿司が好きだったからね、それをもう夢中で食べたんですが、片方の手にはサツマイモを持っていた。当時、昼には決まってジャガイモとサツマイモが出て、これは昼食と夕食分ですから、どちらかを食べるんです。私は、そのサツマイモを手にして面会場所に行って、そのサツマイモを離さずに巻き寿司を食べたんです。すると親父にもものすごく怒られた。「お前の好きなものを持ってきたのに、それ以上にサツマイモが大事か」と。私は「これは僕の晩御飯だ」と言っていて、目を三角にして睨み返した。これは親父が亡くなってお袋から聞かされたんだけど、私がジャガイモとかサツマイモを食べてるということを知って、家に帰ると「もうこれからはまともなご飯はやめよう」と言っていて、それ以降何年もそういう代用食を食べたと、お袋はしみじみと私に言い聞かせた。「お父さんは偉かったで」って、本当に嬉しかった。そんなにまで私のこ

を思っていてくれたんだなと思って嬉しかった。

それから何年か経って、お袋から「墓を作ったから見に来い」という手紙が来た。明石の墓地まで行って、お袋が建ててくれた墓の前で手を合わせた。その後、お袋から「雅男、この墓はどちらに向いている？」と聞かれ、「西を向いている」と答えた。するとお袋は「そうや、西は西でもお前の住んでいる方に向けて墓は建ててもろたんのだ。これ、お父さんの遺言や」と言った。今はもうお袋もなくなってしまったけど、その墓が常に私を見ているという気になった。おかげで、「人間らしく生きよう」という気持ちがあふん膨らんできた。墓と向き合っているうちに、ふと思っただのが、今の生き方なんです。こんなところに入れられているけれども、「人間らしく生きていこう。恥ずかしくない生き方をしよう。」それが両親への恩返しとして、私の大きなスローガンみたいになっている。今現在の私の生きていく姿勢というのは偉くはなっていません。ただ恥ずかしくない生き方はしていますと言い切れると思います。

■一時退所

昭和33年に、厚生労働省が、療養所から出て、社会復帰できる軽快退所基準を制定し、私は愛生園の外に出ることが許されました。3回くらい菌検査をして、菌が出ないということになったら社会復帰が可能になります。ですが、仕事に就けるかどうか分からないし、自分で食べていくことが難しいという人は、なかなか出ていきませんでした。ですので、まず自治会で考えられたのが、自動車免許の取得、そのほかに手に職を



一時退所

もつための資格とか技術の取得などありましたが、私は自動車免許を取りました。それから就職をしました。食事付きの運送会社を探していたら、大阪のほうで良い会社に就職することができました。半月ほどトラック運転手の助手をして、その後は、車を与えられて、自分で車を運転するようになった。大変つらい思いもしたけど、働いた人の汗を感じることが出来て非常に良かったですね。とても良い会社だったので10年ほど働きました。でも、10年働いた結果ね、今の自分はどうかと振り返った。愛生園では、以前に囚人のような扱いを受けることがあって、たまらなく悔しかった。だから、そういうところからも逃げ出して、人間らしく生きていこうという思いもあって出ていった。でも10年経って、自分の心に問うてみた時に、心が真に喜んでいないことに気がついた。周りの人たちが、会社の同僚とも、運転手仲間とも親しくなっているけども、病気のことを隠していて、本当の自分の姿は見せていない。自分のことを打ち明けるというような勇氣もその時はなかった。そもそも私は社会人として生活をしていくということを求めて外へ出たけど、10年経って愛生園を見たら、大阪で生活しても、愛生園で生活してもなんら遜色がなくて、要は、自分の心次第だ、考え方次第だということに気がついた。愛生園だったら、自分の自分を隠さず、裸になって生きていくことができる。病気を隠すこともいらない。だから、本当に自分を丸出しにして人間関係をつくるということは、今の大阪ではダメだから、愛生園に戻って人間らしく生きていこうと思いました。

■結婚

私が今の奥さんと一緒になったのは自治会がきっかけです。書記が一人欠員状態だった時に、勉強するつもりで書記として来てくれることになり、それでよく話をするようになった。聞かれたら教えてあげたり手伝っ

てあげたり、休みの日にはドライブに行くなど仲良くなっていきました。ある時に僕は60歳で、奥さんと13歳という年の差は気になったけど、それよりも、これから先だんだんと歳をとって、色々と不自由な状態にもなりかねないと思い、助け合う相棒が欲しいなというふうを考え始めた。その頃、彼女も同じことを考えていて、「1人よりも2人のほうが心強いかな」と言ったので、お互いに支え合っていこうじゃないかというところで結婚することになりました。



結婚

結婚はみんなに祝福されました。歳の差が13ということもちょっと頭に引っかかっておりましたけど、できる限りそういうことはもう二の次の問題として、お互いに弱いから、助け合っていこう、支え合っていこうというのが一番のお互いの考えの土台になっています。だから、今でも仲良く暮らしています。

■啓発活動

ハンセン病問題啓発活動を始めたのは、この病気のことについて一般的に知られていないことよりも、誤解が大変ひどかったので、本当のことを知ってもらおうと思ったことがきっかけです。プロミンといういい薬ができてから、体にある菌が8割方なくなってきたけど、一般には旧態依然の治らない病気、怖い病気と当たり前のようになんか言われました。だからこそ黙っているわけにはいかず、本当のことを知ってもらうには話をしなければいけないと思いました。悔しくて、一つの意地みたいになって、口を切って話さなければいけないという思いにかられたこともきっかけです。



啓発活動

啓発活動は、初めの頃はこちらが出かけるのではなくて、大勢の見学者が来て入所者の話を聞くというものでした。その頃は自ら愛生園の外に出て話をする人は少なかったです。当時の自治会の役員が見学者のような人たちに話すのは初めてのことでした。しかし、いつまでも役員だけの限られた人たちが話をするのではなくて、多くの人たちに参加してもらって、それぞれの病気に対する辛さや、社会との関係がどうであったのかなど、体験を語ってもらおうということになりました。自らの体験を元にして語る人が多いけど、病気のことだけではなくて、人権問題にも触れながら話をします。かつては職員と入所者の関係も本当にひどい状態でした。療養所で働く職員さんが最も理解していなければいけないのに、一番理解に乏しかったです。当時は、この病気は治らなくてうつりやすい病気という認識で、恐ろしいほど完全防備で、「お前らは汚い存在だ」と見下したような扱いで患者に接してきました。病気のこと、医学のことを一番知っているのが職員さんであるのに、なぜ理解してくれないのかという激しいやり取りもしてきました。それから、国に対して、ハンセン病の啓発にも力を入れてほしいということを訴えました。そうすると、厚労省から施設の職員に対して「もう少し勉強してほしい」という通達があり、職員の方の考え方が改まってきました。

次に、中国地方の学校を回りましたが、そこで、真剣に生徒さんに向き合いました。将来のある若い人たちに一番理解して認識を変えてほしいという思いがありました。僕たちが今、一番力を入れてい

るのは「ハンセン病の後遺症」です。ハンセン病特有の後遺症は、熱い・冷たいの感覚が分からなかったり、汗が出なかったり、手足の関節が侵されて指が曲がったり、足首が下垂するなどの症状があります。お医者さんに聞くと、もつといっぱいあるけど代表的にあげるのはこの3つで、病気そのものは治っているが、そのような特有の後遺症が残っていることから、本当に治ったのかという疑いが残ってきました。それをなんとしても克服しないとけないということ、多くの時間と力を入れて、後遺症について話してきました。

その次は、何十年も隔離をされてきて、人間同士の交流が少なかったから、「残りの時間で今からでも人間同士の人間らしいお付き合い、交流を深めていきたい」という思いに駆られてきました。

この「病気のことをいろいろ理解してほしい」ということと、「外の人たちと対等に人間同士で語り合いたい、交流する」ということは、「人間らしく生きたい」という思いの一つの表れだと思えます。そのような形にまで徐々に啓発運動の内容も変わってきたと言えらると思えます。

■今後やってみよう

山ほどあるんですけど、残りの時間をいかに生きてくかということがね、1番の課題になってますね。1日を振り返った時に、あるいは人との出会いがあったりした時には、極力前向きになって身の上話をしたり、長いこと隔離されていたんで引つ込み思案には絶対になつたらいけない、前に進んでいこう、自分からはそういう行動を取らないといけない、「人間

らしく生きていくんだ」ということを口にするだけじゃなく、やっぱり何らかの形で態度に表していきたいと考える。でないと、本当の自分たちの生き様を見てもらうということとはできない。今私が、これからやりたいことは、一番は1日1日を大事にして、人間らしくあることです。そのため、どうしたらいいのか。人間らしく生きていくというその証明はどういうことかと言ったら、やっぱり心身ともにものの考え方にあると思うんです。だから、今日1日何もなかったようだけど、心の変化は色々あつて。今日、例えばこういう時間が持てたな、9月9日の午前中はこうだったなということも、人と生きてきた、生きている証。そういう証を積み重ねていくということは、今最も自分に課せられた部分じゃないかな。そう思ってます。

■社会に対する願い

日本という国はね、いまだに人権ということに乏しいらしいです。だから、もう少し人権について、真剣に人々が取り組んでほしいな。そこで人権尊重という社会が作られてくる。これが、理想の理想ですね。だから、お互いに寂しい時には助け合い、支え合う、そして、それぞれの人権を、人格を尊重する。ありきたりな言葉なんだけど、それが一番大事なことじゃないかなというふうに思いますので、そういうことを重んじる社会になつて欲しいな、そう思います。

「取材日…2023年8月25日／9月9日」

【聞き書きを終えての感想】



今回聞き書きをやってみて、最初は不安と緊張でいっぱいでしたが、石田さんと話すのが楽になり、自然体で取材を行うことができました。石田さんから、ハンセン病の過去と現在、これからについてたくさん話をうかがいました。今までハンセン病の勉強はしていましたが、回復者の方本人から話を聞いたことはなく、まだまだ知らない事がありました。石田さんが体験された療養所内での生活、愛生園外からの偏見・差別等について、どれだけ過酷な思いをして今日に至るのか、私には計り知れません。石田さんは、取材の中で「人間らしく生きていくんだ」というということを口にするだけでなく、何らかの形で態度に表していきたい。1日1日を大事にして、人間らしく生きていきたい。」とおっしゃっていました。石田さんの話の中で「人間らしく生きる」という言葉を沢山聞きました。それほど今までハンセン病という病気の影響で、身体的だけでなく精神的にも苦しんできたんだと改めて感じました。この聞き書きで石田さんが話してくださったことを周囲に広く伝えていくことが必要であると思える機会になりました。この度はありがとうございました。(田中芽依)



これまで聞き書きを行ったことがなくて、石田さんに直接お会いするまでは不安でしたが、「緊張しなくていいよ」と優しい言葉をかけてくださったので落ち着いて話すことができました。石田さんのハンセン病に対する前向きな思いや、自分たちが調べただけではわからないことを聞くことができ良かったです。私は高校生になって初めてハンセン病を知りました。調べていくうちにハンセン病には長い歴史があり、今では考えられないほどの差別や偏見によって、多くの人々が苦しめられてきたことがわかりました。石田さんの話してくださった過酷な状況にも驚きましたが、それ以上に、石田さんのように、「ハンセン病について知ってもらいたい」「治らない病気という誤解を解きたい」という前向きな思いで活動している方たちがいることが一番に残っています。ハンセン病について語ることができる方が減っている中、石田さんにインタビューできたことは本当に貴重な経験でした。ありがとうございました。(木村有布乃)



聞き書きを行うのは今回が初めてでした。最初は分からない事だらけでとても不安でしたが、石田さんはとても気さくで話しやすい方でしたのですぐに緊張は解けました。元々、学校でハンセン病についての勉強をしていましたが、実際に石田さんから直接聞くハンセン病に対しての差別や偏見はとても過酷でとても心に残りました。その中でも、一番に残っている言葉は「いまだに日本は人権について乏しい。だから、もう少し人権について真剣に取り組んで、人権尊重という社会が創られるのが理想です。」という言葉です。この言葉を聞き、単に自分がハンセン病について学んでもそれを周りに伝えていかないと社会は変わらないと思いました。今回聞き書きに参加することで自分が学んだことを周囲に発信出来るのがとても嬉しいです。この度は、この聞き書きプロジェクトに参加させていただきありがとうございました。(松田愛香)



今回、初めて聞き書きを経験しました。初めての事だらけで不安しかありませんでしたが、やっていくうちに自然と不安がなくなってきました。最初の訪問の際、緊張することなくお話が聞けたのは石田さんのおかげだと思います。私は小中学校とハンセン病のことについて触れる機会がありましたが、当事者の方から話を聞くのは初めてでした。授業で聞くのと石田さんから直接聞くのとでは想像以上に印象が異なり、当時の偏見、差別の過酷さに驚きすらありました。お話を聞く中で石田さんは何度も「人間らしく」という言葉を言っていました。私となにも変わらない人間でありながら、石田さんからこの言葉を聞いて、私はそのような言葉がでてるほど苦しい日々だったのだろうか、と思いました。またお話の最後には「人間として生まれて良かった」とも言っていました。石田さんにとってハンセン病に感染したことは悪いことばかりではなかったのか、そういったようにも感じられました。この聞き書きで私はたくさんの出来事や思いを聞きました。このことをもっとたくさんの人たちに知ってもらい必要があるんだと思いました。このような貴重なプロジェクトに参加させて頂きありがとうございました。(矢延彩矢)



profile

石田 雅男

1936年8月12日・87歳

国立療養所長島愛生園入所者自治会副会長

【略歴】 兵庫県明石市で生まれる。10歳のときにハンセン病と診断され、長島愛生園に入所。30代で社会復帰をしたが、40代で愛生園に戻る。以降、自治会の仕事に従事する。

1999年、自治会の仕事で知り合った女性と結婚。人権啓発教育活動を精力的に行っている。

絶対に味方はある 誰かの味方になる

気づかれたい被害者のために私たちができること

語り手

ハンセン病家族訴訟原告Aさん

■ジープを追いかけたあの日

父が療養所に連れていかれたのは、それこそ、第二次無らい県運動と言って国、県同士が自分の県にはハンセン病患者はゼロにしましょう、全部療養所に入れましょうと競争しているころです。みんなハンセン病って怖い病気だねって鵜の目鷹の目で探して、保健所、お巡りさんに言って療養所に入れましょうっていう時代でした。第二次無らい県運動が一番厳しい1950年に父は部下に密告されて仕事ができなくなって、県庁所在地から父の実家に帰っていました。そういえば保健所の人が何回か来たとか、両親が夜中に話していたとか、父はいろんな人が来た山に隠れていたなんていうことを覚えています。だから父がジープに乗せられて療養所に連れていかれたのは、とにかく父も観念したんでしょうよ。私が5歳の時です。その日に限って母が「どっか遊びに行っておいで」って言って、

聞き手

聖心女子学院高等科1年

江川カンナ

緒方ゆい

神田優子

北山葵

崎田日和

帰ってる途中に人だかりを見つけてなんだろうって思っていたら、父がジープに乗せられていて、私と目が合っちゃったの。その時はハンセン病だなんて思っていないから、父ちゃん連れていかれたと、走って追いかけた。泣きながらお家に帰るときに、お家やその周りが真っ白に消毒されているってのが見えて、今日はお家に帰っちゃいけないよ、今日からおじいちゃんのとこに泊まるんだよっておじいちゃんのお家に連れていかれて、さあ何事が起こったんだろうっていう、感じでした。

■「らい病の子」

私が小学校2年生になったとき、兄が病気になって兄も療養所に行きました。みんなハンセン病のことは知っていたけれど、お兄ちゃんにやつけれちゃうから、お兄ちゃんがいる間はいじめられなかった。お兄ちゃんがいなくなると、2年生になって、いじめが始まりました。その時

に、同級生から「らい病の子だ」といわれた時に、ハンセン病は嫌われている病気だっというのわかりました。でも、それがどうしたの、みたいな感じで「うつしてやる」とか言っただけで言い返してました。その時に腹が立ったから、みんなの前で先生に、「こんなことされてます」って言ったの。そしたら先生は下を向いて「仕方がないじゃない、ほんとのことだから。それで、あんたはいつまでここに來んのかね」っておしまいにされてね。その仕事まで覚えてます。喧嘩してはいたけど、でも先生に言われたら、納得しなきゃしょうがないって思ったのか、「だって父ちゃんが病気なの、嘘じゃないんだもの。それでジープに乗せられて連れていかれて、私がそのジープを追いかけたのは事実なんだから、しょうがない。あ、そうなんだ」って今思うとストーンと降りたような気がします。そんな風に言うんだってびっくりしたけれど、みんながそう言うような嫌な病気なんだって本当に思ったことも事実なので、もう絶対にこれは人にしゃべらない、相談しないと、おばあちゃんや母、ましてや妹にも言いませんでした。小学校2年生のときだけ母は専門学校に行っていて、妹も叔母の家に預けられていました。私はおばあちゃんやまの家にいたので、学校に行かないって言うたり、いじめられて泣いたりして、おばあちゃんを困らせまいとしていました。

■療養所にて

小学校3年生になってからは、母が帰ってきたので母と妹と3人で暮らすようになりました。父がいた療養所からは7・5キロくらい離れていて、1時間半かかるけれど、小学校低学年でも何となく歩ける距離に住んでいたんです。だから、小学校3年生の2学期から引越す5年生の2学期まで2年間、毎週土日は、妹と一緒に見つからないようにこっそり父のところに行っていました。それこそ、父たちがいるとこが有菌地帯、スタ

ッフさんがいるところ無菌地帯ですごく分かれていて、見つかるクレーゾールっていうとつても臭い消毒液が入ったプールに入れられて、今度は薬をまく噴霧器でクレーゾールを体中にかけて、びちょびちょにされました。そんな感じだったので、ばれないように行っていました。だから、なんとなく皆さんが来るよーって教えてくれて、父の部屋ではなくって、別の入所者の部屋に押し入れがあつてそこに隠れていました。でも、父ちゃんや遊び相手のお兄ちゃんたちが待つていて、皆さんがとっても可愛がつてくれるし、お菓子もいっぱいくれるし、見つかるのが怖いよりは会いたいっていう気持ちのほうが強かったです。だから療養所の中で育つたので、その患者の人たちを怖いと思ったこともないし、大事にしてくれたので、変な風にはいかにないで、いま元気で皆さんに話ができるかなと思います。なんでこんな優しい人たちなのに差別されてこんな目に合うのとは思ったけれど、私がつつている間は、自分たちで、豚やニワトリを飼ったり、食事の支度をしたり、みんなで自給自足みたいなことをしていたので、あ、ここではこんな風に生きていくんだという風にしかその時は思っていなかったです。

■こんなもん、いいんじゃない

結婚するときにはもちろん隠さずに主人にすべてのことを言いました。ハンセン病患者の家族が理由で結婚を断られたり、離婚をするケースも少なくありません。しかし、私は父が大事だし、隠して結婚しちゃうたら相手様にも悪いじゃない？ だから相手側がいいって言わないと結婚するまじと思つたのは事実だしね。そして、実際主人はハンセン病に対して偏見を持つていなかったからよかつたのよ。それよりもハンセン病そのものを知らなかつたんだと思います。だから、こんなもんだと一瞬思つて、こんなもん、いいじゃないと思つました。兄も病気とは結婚した時には言つて

いなかったの、結婚して何年か経った後、「今、兄がいる療養所があるので、そこに連れてってください」って言ったなら、連れて行ってくださいました。帰りの車の中で、「兄貴も親父とおんなじ病気か？」って言われたので、「それで？じゃあ離婚しますか？」と言いましたね。

■今更向き合ふことに意味がある

大人になってからの生活は子供の頃とは大きく変わりました。例えば、ママ友には私の親や兄はハンセン病だったのよって一言も言っていない。だからと言って隠すわけでもなく、私の父です、兄です、と紹介しているけれど、ハンセン病患者ですって一言も紹介していません。今更いふ必要はないし、言って何が変わる、私自身が変わるわけではありません。大人になってから、私は妹の誘いもあり原告になろうと決めました。原告として活動を始めようと思ったきっかけとしては、もともとハンセン病という病気をたくさんの人に知ってもらうべきだと感じたからです。私は、こんな女なんて、喋れ喋れと言われれば、そうですかそうですかと言ってきました。しかし、さらに深く皆さんに話を聞いていただくと思ったのは最近のことなんです。昨年までは、こんな風に知らない人に、ハンセン病について語ることに対して、抵抗がありました。しかし、今では「なんでも聞いてください」とまで思います。

今年の3月までの2年間、ハンセン病に関わる偏見差別対象のための施策検討会がありました。そういうものを作ってくれて、国がこれからどうすればいいのか、ハンセン病の偏見差別がなくなるためにはどうすればいいのかっていうのを、何とか国としてやりますので、その委員会を作ってみるまでやっていこうみたいなのがあったんです。そして、その中で「家族の意見はあるのか」と尋ねられました。しかし、私自身が家族の被害について、あんな風にいじめられたね、悪いことされたね、とか、それ

こそおじさんたちもいじめられたね、とか、そんな風に思っていたけれど、そういうところで家族の被害について喋ってくださいって言われた時に、自分でしつかり喋ることもできなかったです。そして、私だけじゃなくって、家族原告の人たちの話を私はいっぱい知っているのに、それをもっと上手に話せなかった自分は、もう一回勉強するべきではないかなと思いました。せっかくなきゃやっつけて国が、被害を言っただけで、どうすればいいですかって、言ってくれたのにもかかわらず、何にも言えなかったの、皆さんにもっともって知ってもらわないとって思いました。このハンセン病問題、偏見差別っていうものが、少しでもまずは少なくないかなと思えます。そのためにまずハンセン病問題を知っていただければ、差別はなくなるのかな、と思いました。ましてや国がね、この人たちがいいですよ、この人たちの病気は業病だよってしてきたのは、失礼な話だと思います。それは国がしたことだよっていうのを、みなさんに知ってもらえればうれしいなと思って始めました。妹には、原告になりたいけれど、傷がまだ癒えていないし、お姉ちゃんがいなくて何も話せないと言われました。原告になると決めた後、周りもみんな頑張ってくれてくれるんです。そして、主人に「原告になるけれどいい？」と尋ねました。すると、主人は「なんで今更？」と言いました。その時に娘が、「別にママがやりたいって言うんだったら、いいのではないの」と背中を押してくれました。こんな風にして私の原告としての活動が始まりました。原告の活動を始めてしばらく経ってから、ハンセン病の問題で出かけるようになってくると、なんとなく「また出かけんの？」というような気持ちがある主人の中に芽生えたんだと思います。それから、「わたくし顔出していいでしょうか？」って言ったなら、それだけは勘弁してくれって言われて、とにかく行動するのはいいけど、顔出しはやめてくれと言われました。今では、原告としての活動のきっかけをくれた妹も、妹の子供たちも知っているんだとは思いますが、

妹は、自分のおじいちゃまが病気であったということ自分を自分からは言っていないので家族には知られたくないようです。妹は、裁判の原告になることは誘ってくれましたが、私がいまこのように多くの人に伝える活動をすることはなんとなくよく思っておりません。私がハンセン病について幼少期のエピソードや父親や兄の話をいくらしても、私の傷が癒えることは無いからだと思います。

■国会議員の前で始まった原告活動

一番初めに活動したのは裁判が始まってすぐかな？

国会議員の皆様の前で、家族原告とはこういうものですよっていうのを話をさせてもらったのが一番初めじゃないかなと思います。次が熊本の裁判所で、私はこういう目にあいましたみたいなことを、意見陳述をさせてもらって、次が聖イグナチオ教会でやらせてもらって、今こうやって高校生の皆様と話しています。聖イグナチオ教会では、私の子供のときからの話をして、皆さん応援してください、とお願ひしたり、ほかの方が裁判はこうやってやりましたみたいなことを話しました。福祉大学のゼミの方や、岡山のノートルダム



11/1のインタビュー時の様子

清心のゼミの方や、立教女学院などでもお話をさせてもらっています。現在は、家族原告の会、あじさいの会で啓発活動をしています。

■世界の差別、偏見をなくすために

どの世界でもね、いじめはいけないとか偏見・差別はいけないって言うけど、人間だもの。

色んな心に感情があるのは当たり前で、自分が一番だと人間みんな思っているの、やっぱり意地悪もしたくなる。だけど、いじめられて、意地悪されている、悲しそうな人がいたら、寄り添ってあなたの味方してあげるよ、という心を持っていただけたら、嬉しいかなと思います。

もし自分がいじめられたときに、絶対誰かいるから、父の療養所で私をかわいがってくれたみたいに、絶対に味方がいるよ、と言えるような人になっていただければ、こうやってお話しした甲斐があるかな、と思います。だけど、みんなが世の中に出た時に、自分と相性が合わない人が意地悪な人と思うかもしれないけど、自分が嫌な時は相手もそう思っているし、自分のどこかに優しい、受け入れられる何かを持ってもらえれば、こうやって嫌な思いをして、国からこれだけいじめられても、大丈夫な私みたいな人がいたので、少しでも強くなっていたければ、嬉しいかなと。

国が決めた法律はできないわけで、法律を作るのは国会議員の人なので、選挙に行く私たちは正しい人を選ぶ義務があると思うの。その人たちが悪い方にならないように、一般の選挙権を持つ私たちがそれを決めます。まずは選挙に行ってください。

〔取材日…2023年10月13日／11月1日〕

【聞き書きを終えての感想】



今回、私はハンセン病とはどのような病気なのかもよく知らない状態でこのプログラムに参加しました。私たち高校生の世代は、ハンセン病について社会の授業で学ぶのみ、歴史上の事実という印象しかありませんでしたが、実際にハンセン病の差別や隔離政策に苦しんだ回復者の家族の方にお話を伺ったことにより、私にとってハンセン病の差別は歴史上の事実ではなく、患者さんやその家族を苦しい思いにさせた許されない出来事という印象に変化しました。Aさんにインタビューをしている際、お父様が強制収容されてしまった状況についてお話してくださっているときに泣いていらっしやっただけがとても印象的でした。身近な家族が本人の意思に反して隔離されたり、辛い思いをしたりすることはあってはならないことです。ハンセン病は過去の話ですが、最近でもコロナの罹患者や医療関係者に対する差別があったり、病気の人を過剰に避けたりするという差別行為は行われています。今回のプログラムに参加して学び知る機会を得た私たちは、周りに流されずに自分の意思を持ち、その人の見た目やステータスに惑わされずに本質を見ることを大切にしていきたいですね。今回学んだことを糧に、よりよい社会にしていけるために私たちが主体的に行動していく必要があると感じました。(江川カンナ)



私は、今回Aさんのお話を伺って、らい予防法があった当時のみならず、撤廃された今も回復者の方やご家族の方に対して残る偏見や差別の影響から、いまだ家族にさえ話せていない方もいらっしやるということに、とても衝撃を受けました。同時に、私の中でハンセン病問題は、それまで社会科の授業や映画などでしか見たことのない過去の出来事という認識にすぎなかったのだということに気づかされました。私たちは、らい予防法が廃止された後の生まれですが、ハンセン病問題が浮き彫りになったあとの現代にも、コロナ流行当初など、ハンセン病に対する無意識の偏見と同じように、無知による偏見や差別は起こりえるということも今回得られた学びの一つです。

またこのような問題が起こらないよう、Aさんがおっしゃっていたように、誤った情報に流されず自分で判断できる力を養ってきたいです。そして、ハンセン病問題を風化させないためにも今回お話しいただいたこと、学んだことを友人や周囲の人にも共有していきたいです。(緒方ゆい)



私はこのプログラムを通し、Aさんとお話しさせていただいて、自分の中にあつた潜在的な決めつけに気が付けた。お話しする前は、差別をされて大変な思いをされてきた被害者の1人なんだろうな、と思っていた。しかし、Aさんとお話していく中で、つらい思いをされても精神的に強く生きてこられた方がいることを知り、ハンセン病回復者のご家族を、被害者とひとくくりにして考えてはいけないことに気が付けた。また、多数の人を一緒に考えてしまうことは全ての人の意識に共通しており、それが偏見や差別につながっているのではないだろうか。

私の中にはまだまだ潜在的な決めつけが存在するだろうが、存在している可能性に気が付けたことが大きな収穫であった。ハンセン病に関して何も知らず始めた活動であるが、このプログラムにより、ハンセン病の実態や、私が生まれる前に行われた忘れてはいけない事実を知ることができた。プログラムに参加させていただいた私たちの使命は、この事実を正確に世の中に伝えていくことだとプログラムを進めていく中で改めて感じている。

この貴重な機会を無駄にせず、これからの人生に役立てていきたい。(神田優子)



私はこのハンセン病回復者のご家族への聞き書きプログラムに参加して、学校で習った内容と事前に読んでAさんの資料の内容の知識しかないままに参加しました。私達高校生はハンセン病という病気あまり触れてきていない世代で、知らない間にハンセン病にかかった方、その家族の方はこんな思いをしてきているんだろう、という偏見を持っていたことに気づきました。Aさんにインタビューをしていく中で気づいたことが、小さい頃からつらい経験の中でも、明るく元気に過ごせるようにと、強く、ポジティブな思考を大事にいらっしやっただけでした。まだまだ知らないことはたくさんありますが、今回の活動を通して、ハンセン病の知識と、ハンセン病回復者ご家族の方への差別・偏見についても多くの学びがありました。(北山葵)



私は今回の活動を通して、差別の恐ろしさを強く感じた。

私は、この活動に参加する前までハンセン病に対して知っていた事は患者の方々やご家族が国からの差別を受けていたということだけだった。私はAさんがインタビューの際に、「ハンセン病に対して怖いという感情を抱いたことがない」という言葉を聞いた。その時自分が心のどこかでハンセン病に対して怖いという感情を抱いていることにハッとさせられると同時に、偏見をもつだけでなく無関心であることも差別なのだ気づかされた。そして私はこの活動中になぜ、同じ人間であるのに互いの個性や価値観を認め合うことができないのか、と何度も考えさせられた。今でも、世界中に差別をされ辛い思いをされている方が多くいる。私はそんな時もし誰か一人でも寄り添ってくれる人がいたら少しでも心が救われるのではないかと思う。私はお互いが寄り添い合うことこそが迫害や差別をなくすために今できることだと思う。

今回の活動を経て学び、考えさせられたことを自分の糧とし生きていきたいと思う。

今回お話しくださったAさん、先生、そして事務局の方を始めとした企画にかかわってくださった皆様に御礼を申し上げるとともに、このような貴重な機会をいただけたことに感謝いたします。(崎田日和)

profile

ハンセン病家族訴訟原告 Aさん

1945年・78歳

【略歴】 小学校のころ父がハンセン病で強制収容され、その家族として、当時のことを話す活動をされています。今はお孫さんやひ孫さんに囲まれてご主人と2人で暮らしています。

発行日：2024年2月

発行：「第23回ハンセン病問題に関するシンポジウム」事務局 公益財団法人笹川保健財団